

新水俣市史 上巻

平成三年十月一日発行

編集 水俣市史編さん委員会
発行 水俣市

熊本県水俣市陣内一―一―一
電話 〇九六六一六三一―一―一

印刷 株式会社

本社営業所 東京都新宿区西五軒町四―二
九州支社 福岡市中央区春吉三―四―二
電話 〇九二七五一―八八八七

第七節 沖繩疎開学童

太平洋戦争は昭和十九年になると日本軍は各地で敗退あるいはせん滅され、戦況は日々に不利になり、連合軍の本土上陸も考えられる状況になってきた。

本土上陸をするには、まず沖繩を占領し、そこを基地として攻撃して来ることは素人でも考えられる作戦であるから、日本としては沖繩の防衛に全力を集中することになった。

そのために沖繩の全学童を九州、特に宮崎県と熊本県に疎開させ、一般住民も戦力にならない一部の者は同様に疎開させることが国の名によって命ぜられた。昭和十九年七月のことである。

第一次疎開学童三、〇〇〇人は三隻の輸送船に分乗し、二隻の駆逐艦に護衛されて八月二十一日那覇港を出港した。

ところが二十三日夜、悪石島沖において米潜水艦の攻撃を受け、二番船対馬丸は七〇〇余の学童と引率教員、付添職員とともに海の藻屑と消えた。

間もなく第二次疎開の命令が下り、三年生から高等科二年生までの学童を募集し、学童四〇人に一人の引率教員と二人の世話人がつき、ほかに養護教員も付ける編成とし沖繩県各地の学童が集められた。

九月九日午前六時那覇港を出港し、北の瀬底島で南方からの船を待ち、九月十九日二四隻の船団を組んで瀬底島を出発し、潜水艦の出没する魔の海を二晩進んで二十一日無事に鹿児島に到着した。

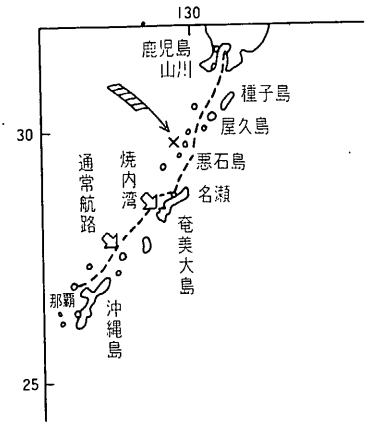
鹿児島で六日間待機し、その間それぞれ疎開先が割り当てられた。水俣組は九月二十七日鹿児島を発ち、その日の午後水俣駅に着き受け入れ先の人たちの出迎えを受けて疎開先に落ち着いた。

首里第二国民学校は湯の尻に、首里第三国民学校は湯出が疎開先である。

湯の尻疎開組（首里第二国民学校）は次のように編成されて、それぞれの旅館に入った。

一班	松島楼	児童数三〇名	
	引率教師	山里 将聖	その妻光子
	寮 母	石川よし子	
	世話人	島袋 マツ	城間 ナへ
二班	芥洲館	児童数三〇名	
	引率教師	徳田 圭子	
	世話人	新垣 トヨ	新垣 ヒデ <small>(現在サヨと改名)</small>
三班	昭南館	児童数三〇名	
	引率教師	玉城 清守	その妻信子
	世話人	玉城 ゴゼ	知念 フミ
四班	三笠屋旅館	児童数六〇名	
	引率教師	野崎 信子	伊地 初子
	世話人	石川千代子	高嶺 芳子
合計	児童数	一五〇名	

沖繩学童の疎開航路 対馬丸沈没の所（矢印）



しかし、戦争激化に伴い、チッソの爆撃、市街地の空襲も激しくなり、食糧をはじめ物資は不足してくるなどのため、集団生活は困難となり、多人数での登下校も通学路が長いため危険が多いことから再度分散疎開をすることになった。教育は、各学校の各学年に混入して行われた。すなわち、昭和二十年五月次のように分散疎開が行われた。

- 1 葛渡 西方寺 三〇名
引率教師 山里 将聖 その妻光子
世話人 玉城 ゴゼ 城間 ナヘ
- 2 水東 初野神社 三〇名
引率教師 野崎 信子
寮 母 野崎 トヨ
世話人 阿波連ソル
- 3 久木野 久木野国民学校教室 児童数 三〇名
引率教師 玉城 清守 玉城 信子
寮 母 石川よし子 野崎 ハル
世話人 島袋 マツ 新垣 トヨ
- 4 湯出 四浦屋支店 三〇名

湯出組は、首里第三国民学校の児童で、十九年九月二十七日の到着当初の編成は次のとおりで、全児童一三七名を四〇人、五〇人ぐらゐに分け三旅館に割り当てられた。

- 一班 諸国屋旅館
引率教師 与那覇 修
世話人 与那覇信子 池原 良子
 - 二班 薩摩屋旅館
引率教師 新垣 政彦
世話人 新垣 俊子 中島 トシ
 - 三班 四浦屋支店（現、永野温泉）
引率教師 新垣 政義
世話人 新垣 松子 城間 ツル
養護教員 国吉 安子
- 昭和二十年に入り、戦況が悪化してきたので全員四浦屋支店一か所に集結した。
昭和二十年五月には湯の児にいた首里第二国民学校の児童三〇名も前述の再分散疎開で四浦屋支店に合流した。
- 引率教師 伊地 初子

世話人 高嶺 芳子 石川千代子

学校での教育は湯出国民学校のそれぞれの学年に混入し、教員も湯出校の教員と区別することなく学級を担任して指導したが、空襲が激化してからは、さらに分散して教育をすることになり、与那覇修訓導は招川内に、新垣政義訓導は頭石に常駐して教育に当たった。

昭和二十年八月、戦争が終結しても沖繩は戦禍で破壊されて状況が不明のためすぐに帰郷することはできず、昭和二十一年六月まで湯出に滞在し、六月に茂道の海軍施設部の建物に移転して生活した。

昭和二十一年十月十五日になって、ようやく沖繩帰還命令が出たので、佐世保港に集結し、疎開滞在二年一月間の悲喜こもごもの思い出を刻んで、十月二十三日無事沖繩に帰還した。

資料

◎戦時中の沖繩疎開学童記

中村清和記

◎沖繩疎開学童について思い出すままに

新垣政義記

◎沖繩疎開学童遭難記

中村清和記

◎昭和六十三年二月二日 前田安男先生への手紙

新垣政義記

第十章 宗 教